

巻頭言：和漢薬研究所の現状と将来

大学の改革，自己点検と評価，独立法人化，大学の統廃合等々，この数年の間に大学は急激な変化を求められています。しかも，大学の入学年齢である18才人口は向こう18年間減少します。このような状況で大学の附置研究所はどのように対処すべきか，現在の和漢薬研究所の最大の課題です。

和漢薬研究所は富山大学薬学部の附属研究施設として出発し，附置研究所として独立，その後，富山医科薬科大学附置研究所として続いています。

この間，生薬学から天然物化学，生化学，薬理，臨床応用まで，各部門がそれぞれの持ち味を出して漢方生薬をはじめとする天然薬物の研究を行い，学会発表や研究論文の刊行という形での活動を行ってきました。

また，研究施設の時代から全国の和漢医薬学研究者を集めて始められた和漢薬シンポジウムは和漢医薬学会に発展しました。近年は国内外の和漢薬研究者を対象とした国際伝統医薬シンポジウムや，研究者のみならず和漢薬に興味を持つ一般市民をも対象とした和漢薬研究所特別セミナーを開催しています。また，全国の薬学・医学生を対象とした和漢薬に関するセミナーを夏休み期間中に開催しています。さらに，漢方診断学部門（寄附）では医・薬学生や臨床医のための短期臨床研修を実施しています。それぞれの会は好評で，今まで理解がなかった人達が和漢薬に親しむようになっていきます。

このような和漢薬研究所の1年間の研究活動をまとめたものが本誌です。

和漢薬を含む天然薬物をめぐる最近の世界の動きは実に激しいものがあります。難治性疾患に対する西洋薬の無力さやその有害作用の大きさに失望した米国民の要求は国を動かし，complementary and alternative medicine として伝統医療を見直し，ヨーロッパ由来の薬用植物製剤や漢方生薬をfood supplementとして利用するようになりました。このような米国の動きは既に東南アジア，特に中国本土，香港，韓国，台湾などには大きな流れとなって伝わってきています。しかし，世界中でfood supplementとして使用されている漢方生薬や植物製剤の中には十分な基礎研究が成されていないものが沢山あります。そこにおける和漢薬研究所の存在価値は非常に大きいと思います。我々の基礎研究の結果に基づいて，food supplement や我が国ではまだ実現の可能性は低いですが天然薬物を作ることも必要かもしれません。

また，先に記述しましたような研究活動を通じて和漢医薬学の研究者人口を増やすことも重要です。

本年報を御一読いただき，ご批判と共に新しいアイデアを頂戴できればと考えています。

平成13年3月

和漢薬研究所長 渡辺裕司